

シンポジウムI 「これからの母乳育児支援—社会の変化の中で」

2) 父親・そして家族全体で支える出産・母乳育児

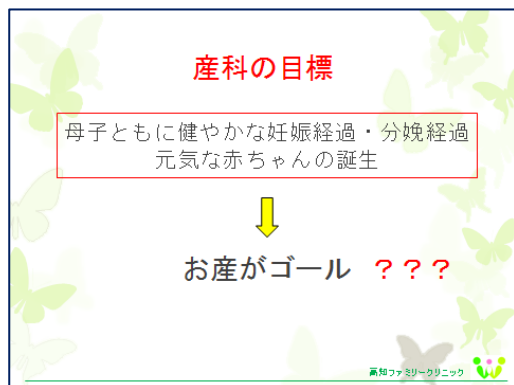
出産は家族の始まりであり、子育ては父親、家族の支援が重要。家族への教育も含めて考える必要があります。

福永 寿則（産） 高知ファミリークリニック／高知市

お産がゴールではなく

スタートと考えたかかわりが重要

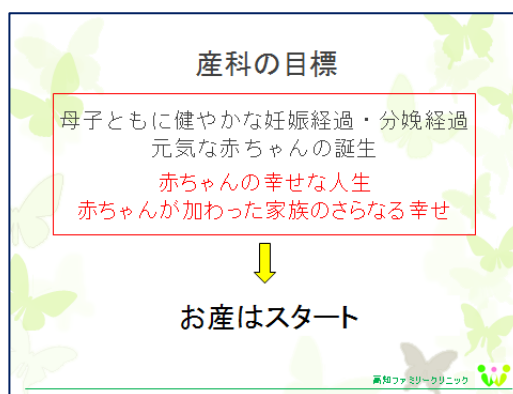
まだ多くの産婦人科では、産科の目標として母子ともに健やかな妊娠経過、分娩経過をたどり、元気な赤ちゃんの誕生を迎えること、すなわち、お産がゴールと考えられています。しかし、ここにおいでる皆様はそうではないことにお気づきだと思います。



これは、生まれはばかりの赤ちゃんの写真です。

ここから赤ちゃんの人生がスタートし、赤ちゃんを加えた新しい家族が始まります。

ですから、出産に立ち会う私たちとしては、元気な赤ちゃんの誕生は当然として、その後続く赤ちゃんの幸せな人生、赤ちゃんを加えた新しい家族のさらなる幸せが願われます。つまり、お産がゴールではなくて、お産はスタートと考えたかかわりが重要と思われまます。



かわいい赤ちゃんを出産され、喜んで帰っていかれた家族には、早速その日からさまざまな試練が待ち受けています。

育児の問題では、かわいいはずの赤ちゃんが泣いて何をしても泣きやまない、また夜寝ないなど、うまく世話ができない自分の母親としての能力に予期せぬ出口の見えない不安を感じます。また、産後まだ回復していない体での授乳による乳頭痛や腰痛、不眠などの体調不良、それらの状況で子どもが自分の思いどおりにならないことに対して、それを受け入れるゆとりがない、赤ちゃんがかわいくない瞬間も日々何度となく味わうこととなります。このようなことは、お母さんにとって精神的肉体的ストレスの大きな原因となり、ひいては虐待にもつながります。

新しい家族が経験する試練

I. 育児の問題

1. **可愛いはずの赤ちゃんが泣く・寝ない**
⇒上手く世話できない自分の、母親としての能力に出口の見えない不安を持つ
2. **乳頭痛・腰痛、不眠などの体調不良**
3. **子どもが自分の思うようにならない**
⇒それを受け入れることができない（ゆとりがない）
⇒赤ちゃんが可愛くない

高知ファミリークリニック

↓

母親にとって**精神的・肉体的ストレス**
の原因

↓

↓

虐待

高知ファミリークリニック

虐待に関しては、常に報道されていますが、7月にも一つの記事がありました。「生後4カ月の長女を踏みつけて殺害した疑い、母親逮捕」とあります。午後9時半ごろ、自宅1階の寝室で長女の心美ちゃんの胸のあたりを数回踏みつけ、心破裂で殺害した疑いがある。育児や家事のことで夫と喧嘩になり、イライラしてやったと話していたそうです。4カ月前に心美ちゃんというかわいい名前をつけたお母さんが、ここに至るまでの変化を思うとやるせない思いになります。こういう虐待事件は特別な母子のみに起こることではなくて、誰にでも起こり得ることだと思います。

この新聞記事によると、生後1カ月健診の時点で27%、4人に1人のお母さんが赤ちゃんの反応を無視したことがあると答え、また、赤ちゃんをののしったというのも10人に1人いることがわかりました。児童虐待につながりかねないこうした行動の背景に育児に負担感を持ち、また、赤

ちゃんへの愛情をうまく持てない母親の存在が浮かび上がったと書かれています。



**子育てを外から支えるのではなく
男性も育児の当事者である**

このような状況を乗り越えるためには、単にセックスをし、妊娠・出産ただけで母親になれるものではなく、一人の女性が出産までに母親という存在に進化することが大事だと思われます。そのためには、幸せな妊娠生活と達成感のある分娩を経て、出産後の産科入院中に24時間続く児との生活にもある程度慣れ、授乳もある程度うまくできるようになってから退院することが必要と思われる。そして、現在のような環境の日本の家族の状況では、妊娠・分娩・産後を通じて、母性形成の支援が産科の大きな役割となっていると思われる。

一人の女性 ⇒ 『母親』に進化が必要

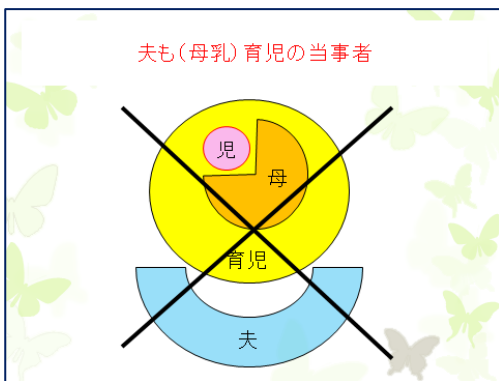
- ・ 幸せな妊娠生活、達成感のある分娩
- ・ その後の産科入院中に、24時間の児との生活にある程度慣れ、授乳も上手できるようになってから退院することが必要

妊娠・分娩・産後を通じて、母性形成の支援が産科の大きな役割となっている

高知ファミリークリニック

退院後、母親は一人で育児生活するのではなく、家族、特に夫に温かく支えられる必要があります。

夫が支える母乳育児、あるいは夫が支える育児といえますと、そのイメージとして子どもに母親が寄り添って世話をする育児という状況があり、それを夫が外から支えるという図を浮かべるかもしれませんが、この図は誤りです。



夫自身も第三者ではなくて当事者であります。夫もまた戸惑う経験ばかりです。正しい知識の不足、準備不足のまま母子を迎え、夜泣きをする赤ちゃん、育児に没入して心身ともに不安定な妻、もちろん夫のことを顧みる余裕などありません。夫自身も大きなストレスや不安を感じるとともに、妻に構ってもらえないことに対する不満も芽生えてきます。

退院後、母親は一人で育児生活をするのではなく、家族、特に夫に、温かく支えられる必要があります。

しかし、**夫もまた戸惑う経験ばかりです。**正しい知識の不足、準備不足のまま母子を迎え、夜泣きする赤ちゃん、育児に没入し心身ともに不安定な妻、もちろん夫のことを顧みる余裕などありません。

夫自身も大きなストレス・不安を感じ、また妻に構ってもらえないことに対する不満も芽生えてきます。

赤ちゃんが関わったことによる 家族関係の再構築を支援

ここでは、初めての出産を迎える核家族について話をしますが、経産婦の場合でも一緒です。夫婦だけの場合、家族生活はすなわち夫婦の生活で

あります。ここに赤ちゃんが加わると、家族生活の大部分は育児生活へと変貌します。これまでの夫婦だけという安定したバランスは壊れ、赤ちゃんが加わって新しい相互関係の中で、新しく安定したバランスを獲得することが必要になります。



このように、新しい家族が経験する試練の二つ目は、家族関係の再構築です。女性は妻としての意識よりも赤ちゃんの母親としての意識が大きくなっていきます。その結果、上の子の赤ちゃん返りや産後の夫婦間の変化なども見られるようになっていきます。

新しい家族が経験する試練

II. 家族関係の再構築

1. 妻 < 母
2. 上の子の赤ちゃん返り
3. 夫の産後うつ
4. 夫婦関係の変化

高知ファミリークリニック

産経新聞の記事ですが、「夫と居るの苦痛、産後変わる妻、夫と一緒にいるのも嫌、性欲の塊に見える、産後豹変する妻たち。夫に嫌悪感を抱き性生活など考えられなくなる。女性の出産後に訪れることがある夫婦の危機だ。テレビ番組で、産後クライシスと名づけられたのを契機に、ここ2、3年、雑誌で特集が組まれるなど関心が高まって

いる。一定期間を過ぎれば元に戻るケースも多いが、深刻なケースでは妻がセックスを拒否し続けて離婚につながる場合があるとされる。待望の赤ちゃんに恵まれ、幸せいっぱいのはずの夫婦に何が起きるのか」とあります。

夫と居るの苦痛 産後変わる妻
 2015年9月23日(水) 9時38分掲載 (YAHOOニュース)
 「夫と一緒にいるのもイヤ」「性欲の塊に見える」
 ...産後豹変する妻たち

夫に嫌悪感を抱き、性生活など考えられなくなる。女性の出産後に訪れることのある夫婦の危機だ。テレビ番組で“産後クライシス”と名付けられたのを契機に、ここ2、3年、雑誌で特集が組まれるなど関心が高まっている。一定期間を過ぎれば元に戻るケースも多いが、深刻なケースでは妻がセックスを拒否し続けて離婚につながる場合があるとされる。待望の赤ちゃんに恵まれ、幸せいっぱいのはずの夫婦に何が起きるのか。(中井なつみ、寺田理恵)(産経新聞)

出産は新しい家族のスタートということは、実は、それまでの古い家族が壊れてしまう家族の危機であります。

出産は家族の危機

この危機を乗り越えるためには、新しい家族関係の中で、家族のメンバーもそれぞれ進化が必要です。女性が妻から母、妻になるように、男性も夫から妻の育児のパートナーとしての存在、そして夫、父という役割に、上の子どもも子どもであり、兄や姉になります。ここで夫が妻の育児の悩みに共感し寄り添うことが大事です。そして、やはり現在の状況では、妊娠・分娩・産後を通じて家族関係の再構築の支援も、産科の大きな役割になっているといえると思います。また、産科には

それだけの影響力、可能性があると思っています。

家族のメンバーそれぞれも、進化が必要

- ・女性：妻⇒母、妻
- ・男性：夫⇒“妻の育児のパートナー”
夫、父
- ・上の子ども ⇒ 子ども、兄・姉

妊娠・分娩・産後を通じて、家族関係の再構築の支援も産科の大きな役割となっている

父性は育児だけではなく
夫婦関係にも影響する

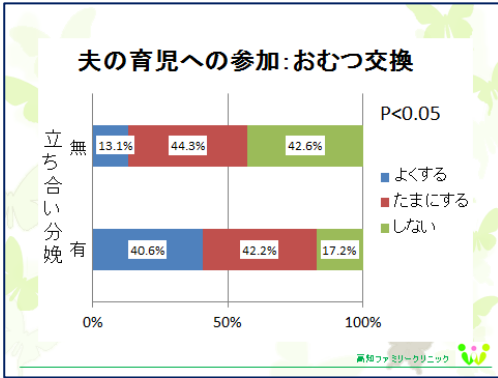
同伴分娩が父性及び夫婦関係に及ぼす影響について。

同伴分娩が父性および夫婦関係に及ぼす影響

山縣猛日 倉井孝子 小林栄子 福永寿則

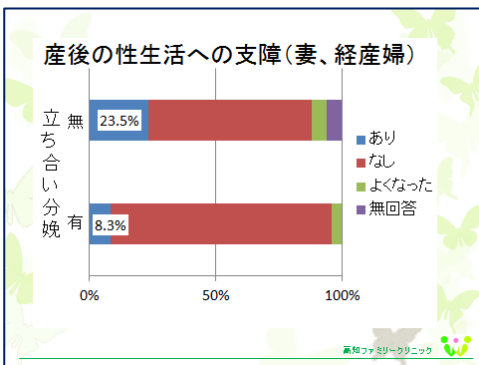
周産期医学 vol.20 no.8, 1990-8

この同伴分娩とは、夫の立ち会い分娩のことです。夫の育児への参加をおむつ交換について、立ち会い分娩の有無で比較したものです。「立ち会い分娩無」のグループでは、「(おむつ交換を)よくする」が13.1%、「しない」が42.6%であったのに対し、立ち会い分娩ありでは、「よくする」が40.6%、「しない」が17.2%と有意に夫の育児参加が増加しています。



これは、産後の性生活の支障を、経産婦の妻の側から見たものです。

立ち会い分娩なしのグループでは、「支障あり」と答えた人が23.5%でしたが、立ち会い分娩ありでは8.3%と3分の1に減少しています。



このことは、育児に協力的な夫は妻を自分の妻という存在としてだけではなく、妻にとってほとんど100%近いウエイトを占めている「育児をする母親」としての存在を認め、その育児に協力して取り組むパートナーとなっている。そのため、妻の側にも夫を全人格的に自分のパートナーとして感じるにより、夫婦関係にもよい影響をもたらすと考えられます。

育児に協力的な夫は、妻を「自分の妻」という存在としてだけではなく、妻にとってはほとんど100%近いウエイトを占めている「育児をする母親」としての存在を認め、その育児に協力して取り組むパートナーとなっている。

そのため、妻の側にも夫を、全人格的に自分のパートナーとして感じるにより夫婦関係にも良い影響をもたらすと考えられる。

また、1995年のルイス・エクソン博士の調査では、母乳による授乳をしなかった母子の虐待率、つまり、人工乳の母子の虐待率は母乳による授乳をしていた母子の38倍とされています。

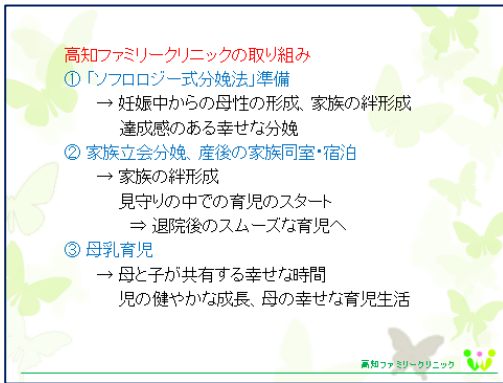
レニングラード病院で母子同室制を取り入れたところ、母親の育児放棄率が約半分にまで減少し、コスタリカで7万8,000人の赤ちゃんを対象に7年にわたって行われた研究によると、授乳や親子対面を早めることによって母親の育児放棄率は激減したと報告されています。ですから、今、日本で多く報道されている虐待なども、実はお母さん自身の問題というよりも、母子を取り巻く出産環境、育児環境に大きな原因があり、私たち医療者に責任のある問題とも言えます。

1. 母乳による授乳をしなかった母子の虐待率は、母乳による授乳をしていた母子の38倍。
(1995年、ルイス・エクソン博士の調査)
2. レニングラード病院で母子同室制を設けたところ、母親の育児放棄率が約半分にまで減少した。
3. コスタリカで7万8千人の赤ちゃんを対象に7年にわたって行われた研究によると、授乳や親子対面を早めることによって、母親の育児放棄率が激減した。

妊娠中、出産時、産後にできる 産科での育児支援

このようなことを踏まえ、産科の立場での育児支援として、高知ファミリークリニックでは三つ

の柱があります。



一つ目は、ソフロロジー式分娩法です。ソフロロジー式分娩法の本質は、陣痛発来から分娩までの分娩法ではなく、実は陣痛発来までの妊娠中の過ごし方が本質です。妊娠中からお腹の子、胎児を家族の一員として過ごすことにより、妊娠中からの家族の絆や母性形成を促進し、それとイメージトレーニングの効果が相まって達成感のある幸せな分娩へと導きます。

二つ目が、家族立ち会い分娩、産後の家族同室・宿泊です。当院では、出産後、お父さんや上の子も宿泊できるようにしています。この目的は、一つは家族の絆の形成であり、もう一つは医療スタッフの見守りの中での育児のスタート、家族のスタートを始めることにより、退院後のスムーズな育児へとつなぐことを考えています。

これは立ち会い分娩です。初産婦さんですが、ほぼ、このとき子宮口は全開となっています。

出産直後の早期母子接触、カンガルーケアです。疲れた表情を見せずカメラに笑顔で向かっています。

当院では、帝王切開もほとんどが立ち会いをしています。お腹の傷は見えないように配慮しています。この画面の奥では、夫婦はお互いの左手を握り合っています。

時には冗談で、人前で手をつなぐのは久しぶり

とか言ったり、結構自由な会話をして過ごします。10歳のお兄ちゃんは、お母さんが痛くないか心配していましたが、生まれた瞬間には涙を流して感動していました。

母子同室です。このような幸せな時間の共有が豊かな母子相互作用であり、愛着形成に有効であると思われます。

家族同室、お父さんも一緒に助産師の話聞き、お母さんが食事をしている間はお父さんが赤ちゃんを抱っこしています。

これは夕方の写真ですが、夜も父と子が一緒に眠ることもあります。

取り組みの三つ目が母乳育児支援です。

母と子が共有する幸せな時間、児の健やかな成長、母の幸せな育児生活を願います。この『はじめての母乳育児と心配ごと解決集』の表紙の絵を見てください。



授乳しながら見つめ合っている母と子の姿、母乳育児は単に母乳を飲ませる行為だけをいうわけではありません。お母さんと赤ちゃんが一緒にいて、赤ちゃんの様子からその欲求を察知し、お母さんが赤ちゃんを抱っこし、声かけをし、赤ちゃんに乳首をふくませる。皮膚と皮膚の直接の触れ合いを通じて、お母さんは射乳の心地よさを、赤ちゃんはお腹が満たされる満足感を感じ、二人はお互

いに与え合う幸せな時間をともにします。

母乳育児では、このような時間が1日に何回となく繰り返され、幸せな豊かな母子相互作用が積み重ねられていきます。この豊かな母子相互作用によって出産した女性は母となり、赤ちゃんは自分の存在感を確認し、自然に赤ちゃんの中に他者との豊かな交流を可能にする心が育ってきます。ヒトという哺乳動物から人という社会的存在になると言われています。

母乳育児は、単に母乳を飲ませる行為だけを言うものではありません。お母さんと赤ちゃんが一緒にいて、赤ちゃんの様子からその欲求を察知し、お母さんが赤ちゃんを抱っこし、声かけをし、赤ちゃんに乳首を含ませる。**皮膚と皮膚の直接の触れ合い**を通じて、お母さんは射乳の心地よさを、赤ちゃんはお腹が満たされる満足感を感じ、二人はお互いに与え合う幸せな時間を共にします。

母乳育児では、このような時間が1日に何回となく繰り返され、幸せな、豊かな**母子相互作用**が積み重ねられていきます。

この豊かな母子相互作用によって、**出産した女性は母となり**、赤ちゃんは自分の存在感を確認し、自然に赤ちゃんの中に他者との豊かな交流を可能とする心が育ってきます。**ヒト**という哺乳動物から**人**という社会的存在となる、と言われて

母乳育児支援は

子育てや家族の支援に通じる

育児支援を考える場合に、「哺乳動物である人間」「家族の中での育児」「乳児期」という三つのキーワードを加えると、それは母乳育児支援につながると思います。

この母乳育児支援により豊かな母子相互作用、母性の形成、家族の絆の深まりを図り、それにより児の健やかな成長、喜びの多い育児、幸せな家族になることを願います。

母乳育児支援

母乳育児支援の内容は、混合栄養や人工乳のみの母子にとっても、その育児を支援する内容に通じる。

豊かな母子相互作用・母性の形成
家族の絆の深まり

↓

児の健やかな成長・喜び多い育児
幸せな家族

もちろん、100人中100人が母乳育児ができるわけではありません。いくら頑張っても混合栄養となる母子や人工乳のみになる場合もあります。しかし、この母乳育児シンポジウムで話されているような母乳育児支援の内容は、単に母乳栄養率を目指したのではなく、そのような混合栄養や人工栄養の母子にとっても、その育児を支援する内容に通じるものがあります。

お産がゴールではなくて、お産はスタートと考えることによって、産科の役割は大きく変わってきます。産科は、妊娠・分娩・産後のかかわりを通じて、妊婦と家族の成長を促し、赤ちゃんにとっての人生のスタートと新しい家族のスタートを支援する大きな役割を担っているといえます。

お産がゴール → **お産はスタート**

産科は、妊娠・分娩・産後の関わりを通じて、**妊婦・家族の成長**を図り、赤ちゃんの人生のスタート、新しい家族のスタートを支援する大きな役割を担っている。

最後のスライドです。家族の中で考えた場合には、「父親、そして家族全体で支える出産・母乳育児」ですが、私たち医療者側から見た場合には、「父親、そして家族全体も支える出産・母乳育児支援」という考え方でかわることが重要だと思われ

以上です。ありがとうございました。

司会：五百蔵 福永さん、ありがとうございました。

父親というキーワードで、現在に必要なことをはっきりと示してくれたように思います。